

【ポスター発表】

島嶼地域高齢者の生きがい感に関連する要因**—社会関連性指標との関連—**

○ 鹿児島国際大学 小窪 輝吉 (2758)

田畑洋一(鹿児島国際大学・1412)、高山忠雄(鹿児島国際大学大学院・441)、田中安平(鹿児島国際大学・6719)、

岩崎房子(鹿児島国際大・4943)、玉木千賀子(沖縄大学・6065)

キーワード：生きがい感、社会関連指標、島嶼地域高齢者

1. 研究目的

本研究の目的は、島嶼地域に居住する高齢者の生きがい感に対する社会関連性指標の関連を検討することである。我が国の高齢者福祉において健康長寿に加えて生きがいのある生活が重要な課題となって久しい。健康長寿に関して、安梅（2000）はふだんの生活における社会とのかかわり状況を測定する社会関連性指標を開発して、この指標が地域高齢者の寿命及び身体機能を予測する重要な要因であることを明らかにした。社会関連性は認知症発症との関連性も指摘され（矢内他、2012）、精神的健康とのかかわりの検討も進められている。本研究では、精神的健康の一つである生きがい感に注目し、高齢者生きがい感尺度（近藤 2007）を用いて生きがい感を測定し、生きがい感を目的変数、社会関連性指標を説明変数とする重回帰分析を男女別に実施した。

2. 研究の視点および方法

奄美諸島と八重山諸島の市街地と集落から調査対象地を複数選定して実施した高齢者調査から、本報告で用いた変数のすべてに回答のあった 323 人（男性 136 人、女性 187 人）のデータを分析対象とした。調査時期は 2012 年 10～11 月、調査方法は民生委員の協力による留置き調査で一部聞き取り形式の調査も併用した。分析に使用した変数は、「性」、「年齢」、「健康状態（4 件法、1 項目）」、「暮らし向き（4 件法、1 項目）」、「生きがい感（3 件法、16 項目）」、「社会関連性指標（4 件法、18 項目）」であった。「健康状態」と「暮らし向き」については 4 件法の値を得点として扱った。「生きがい感」は 16 項目の合成得点を生きがい感得点とした。社会関連性指標については、安梅の採点法に基づき、「あり」または「実施」を 1 点、「なし」または「非実施」を 0 点として得点化し、5 つの領域ごとに合成得点を求め、さらにそれらを合計して社会関連性得点とした。

3. 倫理的配慮

調査票に、調査の趣旨とともに、①回答は自由意志であり回答したくない場合はそのまま返却してもかまわないこと、②調査は無記名で個人が特定できないよう統計処理すること、を記した文書を添付した。また、所属大学の教育研究倫理審査委員会の承認を得てから調査を実施した。

4. 研究結果

まず、性別と年齢によってそれぞれの変数の得点に差があるかどうかを調べるために性×年齢の2要因分散分析を実施した。以下、有意性は5%水準をもとに判断している。結果、①生きがい感は前期高齢者の方が後期高齢者よりも高かった。②健康状態も前期高齢者の方がよかった。③暮らし向きは後期高齢者の方が前期高齢者よりもよかった。④社会関連性得点は前期高齢者の方が後期高齢者よりも高く、また性と年齢の交互作用が有意であり女性は男性よりも後期高齢者の低下傾向が大きかった。⑤社会関連性指標の5つの領域について、前期高齢者の方が後期高齢者よりも得点が高いのは「生活の主体性」「社会への関心」「他者とのかかわり」「身近な社会参加」であった。女性の方が男性よりも得点が高いのは「他者とのかかわり」「身近な社会参加」「生活の安心感」であった。なお「社会への関心」については交互作用があり女性は男性よりも後期高齢者の低下傾向が大きかった。

次に、「年齢」、「健康状態」、「暮らし向き」、「社会関連性指標の5領域」と「生きがい感」との相関係数はすべて有意であった。生きがい感を目的変数とした重回帰分析の結果では、男性の場合、「生活の主体性」と「社会への関心」が生きがい感に影響を及ぼしていた。一方、女性の場合、「生活の主体性」「社会への関心」「身近な社会参加」「生活の安心感」と「暮らし向き」が生きがい感に影響を及ぼしていた。

5. 考察

生きがい感が加齢とともに低下しているのは、高齢になるほど体力気力が低下するためと考えられる。社会関連性全体の得点も加齢とともに低下しているが、女性の方が男性よりも低下傾向が大きかった。安梅・高山（1995）は80歳以降の女性の社会関連性指標が急激に低下することを報告している。この傾向は高齢女性の特徴としてとらえることができるだろう。生きがい感と関連する要因のうち、男女で共通していたのは「生活の主体性」と「社会への関心」であった。安梅（2000）は高齢者の健康寿命にとって「生活の主体性」領域が重要であること、矢内他（2012）は「新聞の購読」という「社会への関心」領域が認知症発症と関わることを指摘している。心身の健康を維持する上でこれら2つの領域が重要であることを示している。一方、女性の場合、「暮らし向き」と社会関連性指標の領域の「身近な社会参加」および「生活の安心感」が生きがい感と関連していた。性差については、島嶼地域高齢者の特徴なのか今後検討する必要がある。

文献

安梅勅江（2000）エイジングのケア科学 川島書店

近藤勉（2007）生きがいを測る ナカニシヤ出版

矢内悠里他（2012）社会とのかかわりと認知症発症との関連性の研究 日本保健福祉学会誌 18(2), 21-28.

注）本研究は、2012年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）「琉球弧における地域文化の再考と地域再生プランおよび実践モデル化に関する研究（研究代表：鹿児島国際大学大学院教授田畑洋一）のデータの一部をまとめたものである。